

撮影地点は、昆虫館の寺谷川側にある植え込みです。タケウチトゲアワフキは草本植物の上に静止していました。ここにはシナノキも植栽されており、本種はここで発生しているものと思われます。

たった5ミリしかない黒い体の背中に鋭い角を持つこの虫をはじめて見たとき、カメムシ目の虫に目がない私はぞくぞくしました。なんというユニークな造形美でしょう。勇ましい戦士のように見えました。その形から、最初ツノゼミの仲間かと思ったのですが、帰宅して調べてみると、タケウチトゲアワフキというアワフキの種類だと分かりました。2013年5月、再び訪れた佐用昆虫館で、今年も見れるかなと植え込みを目を凝らして探しましたが、見つかるまでかなりの時間がかかりましたが、やっと一匹のそれを見つけた時は再会の喜びをかみしめました。角を触ってみると、かなりしっかりしており、もし突き刺さったら痛いかもしれません。この角は他の虫から身をまもるためのものなのか、それなら角は反対方向にないと武器にはならないはずと考えてしまいました。この虫がもっと大きかったら、必ずやカブトムシやクワガタにも負けられないほどの人気者になることでしょう。

(Sonoko MUKAI 大阪府交野市)

初めて出会った、紋流れのヤマトシジミ

清水 典子・清水 萌花

珍しいと言われている紋流れのヤマトシジミを発見したので報告します。

○観察した日と場所

2013年4月18日, 最高気温:22.1℃, 最低気温:13.5℃, 湿度:57%, 風向:南西, 神戸市垂水区自宅庭のカタバミが自生しているエリア

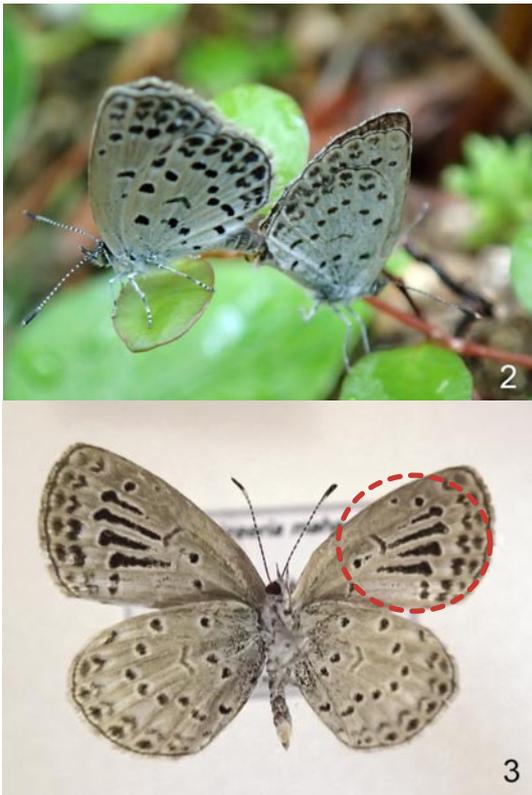
観察した週は、月曜から4日連続で最高気温が20℃を越え、最低気温も10℃以上あり、昼間は動く少し汗ばむような陽気でした。その前週は最高気温が10℃台どまりで最低気温は5℃という日もあり、4月のわりには肌寒い日が続いていただけに、その翌週は待ちこがれた春の気温上昇でした。

4月15日から自宅庭ではアゲハ、モンシロチョウ、ベニシジミと次々に確認することができて気を良くしていたところ、18日にヤマトシジミらしき蝶がひらひら舞っているのであわてて庭に出ました。ヤマトシジミなら初蝶かも？ということで、興奮気味にそ〜と忍び足で近づくと、テラス下のカタバミ（写真1）で翅を休めているヤマトシジミを発見。時刻はお昼過ぎだったと記憶しています。その後もつられるように、今度は別のヤマトシジミが1匹、カタバミに舞い降りてきました。



小学5年生になる娘が日頃から蝶の飼育をしているので、とにかく2匹を捕獲することにしました。まずは写真撮影を試みようとして2匹を比べると、紋に違いがあることにすぐ気が付きました。

1匹は黒い点の紋（写真2）なのに対し、もう1匹は前翅にまるで筆ペンで描いたような線状の紋があるのです。もしかしたら、別の種類の蝶かもしれないよと娘と一緒に図鑑をひたすら繰ってみました。同じような斑紋の蝶は見当たらず、謎はますます深まるばかり…。



そこで、初蝶ニュースの追加情報として変わった紋のヤマトシジミを発見しましたと、こどもとむしの会の久保弘幸さんにメールしたところ、これは“紋流れ”という結構珍しい事例ですよ、と教えていただき、その時に初めて知ったという次第です。身近な空間で、おそらくまたとない紋流れに出会えたことは幸運としか言いようがありません。

ヤマトシジミと言えばどこにでもいる蝶ゆえ、あまり注目されませんが、改めて観察してみると紋は縁取りがレースのように繊細かつニュアンスもあって、地味ながら美しい蝶だと実感できます。

紋流れのヤマトシジミは捕獲してから洗濯ネットで飼育すること4日後、儚く逝ってしまいましたが、久保さんが標本にして昆虫館に展示し、多くの人に見ていただきましょと提案してくださいました。その後、昆虫館で新たな命を吹き込まれたヤマトシジミを目にして、娘と感激しました。

娘は以前から蝶に関心があり、飼育や観察をしてきましたが、この出来事がきっかけで、ますます奥の深い蝶の世界に魅了され、もっと知りたいという気持ちを揺さぶられたのではないかと思います。

末筆ではありますが、この発表をお勧めいただきましたこと、また標本の作成、および短報を執筆するにあたりご教示いただきました久保さんに心よりお礼申し上げます。

(Noriko SHIMIZU 神戸市垂水区)

(Moeka SHIMIZU 神戸市垂水区)

昆虫館周辺で採取したミヤマカラスアゲハから産まれた黒い幼虫

清水 萌花

2013年9月8日、「こども昆虫道場」で佐用町昆虫館へ行った時、庭のヒガンバナに蜜を吸いに来ていたミヤマカラスアゲハのメスを発見し、捕まえました。今まで図鑑でしか見たことがなかったミヤマカラスアゲハは翅に緑や青いキラキラがついていて、やはりキレイだなと思いました。

さっそく家で飼育したところ、9月10日の夕方に何度もお尻を曲げるようなしぐさがみられたのですが、なかなか卵を産みません。そこで、お尻を曲げた瞬間にカラスザンショウの葉をキュッとお尻に押し付けてみました。すると、葉に卵が付いてきました。そんな方法で合計12個の卵をなんとか産ませ、9月14日には11個の卵が孵化しました。

食草は冷蔵庫に保管し、少しずつ取り替えて飼育していましたが、ふと緑色と黒色の終齢幼虫がいることに気がつきました。図鑑に載っていたのはキレイな緑色の幼虫だったので不思議に思い、蝶の先生の久保弘幸さんに写真をメールで送ると「とても珍しいですよ」と教えてくださいました。

私は、同じミヤマカラスアゲハから産まれたのに、どうして黒色と緑色の幼虫に分かれるのか、またどうして黒くなるのか疑問に思いました。私にはその答えはわかりませんが、この後どんな成虫になるのか引き続き観察したいと思います。



(Moeka SHIMIZU 神戸市垂水区)